

2. 緩和ケアに関する看護師教育

C. 卒後教育

2) 専門的緩和ケアを担う看護師に対する教育 (SPACE-N プログラム)

新幡智子

(慶應義塾大学看護医療学部)

はじめに

緩和ケアの質を向上させるためには、基本的緩和ケアに関する教育と共に、専門的緩和ケアを担う看護師に対する教育の充実も欠かすことはできない。

専門的緩和ケアを担う看護師は、基本的緩和ケアでは対応が難しい苦痛・苦悩をもつ患者・家族への対応や複雑なケースに対応することが多く、困難な状況や葛藤に遭遇しても柔軟に対応し、苦や死に向き合っている患者・家族に寄り添って最期まで支えていくことが求められる。そのため、単に専門的緩和ケアに関する知識を習得するだけでなく、専門的緩和ケアの実践に必要なコンピテンシーを身につけ、質の高いケアを提供できるようエンパワメントしていく必要がある。そこで、専門的緩和ケアの質の向上につながる看護師の継続教育の普及に向けて、「専門的緩和ケアを担う看護師に求められるコアコンピテンシー」について明らかにし、それらの向上につながる教育として「専門的緩和ケア看護師教育プログラム (Specialized Palliative Care Education for nurses : SPACE-N プログラム)」を開発した。そして、2014年度より、日本ホスピス緩和ケア協会会員施設における専門的緩和ケアの質を向上するために、協会主催のプログラムとして開催され、2019年1月までに計9回開催し、270名の修了者が全国に誕生している。

SPACE-N プログラムの概要

SPACE-N プログラムは、緩和ケア病棟、緩和ケアチーム、在宅緩和ケアにおいて、専門的緩和ケアを担う看護師を対象とした教育プログラムである。本プログラムは、専門的緩和ケアを実施する場において、リーダーシップを発揮し、意欲的に専門的緩和ケアの質の向上に取り組むことができる看護師を育成し、苦や死に向き合っているがん患者・家族を支えるために必要となるコンピテンシーの向上を図ることを目的としている。

本プログラムの特徴は、一方向の講義形式ではなく、教材 (CD-ROM) を用いた事前自己学習により専門的緩和ケアに必要な知識を深めると共に、哲学対話をベースとした対話形式のグループワークによるセッションからなる5回の研修会を組み合わせている点である。

本プログラムで取り入れている哲学対話の考え方は、ハワイ大学で「こどものための哲学」を推進する教育活動に従事している Jackson 氏が推奨している「community of inquiry (探究のコミュニティ)」¹⁾の考え方に基づいている。この考え方では、対話にはセーフなコミュニティが非常に重視され、対話を通して、探究のコミュニティを形成し発展していくには、身体的、感情的、知的に「safe」であると各自が感じられることが重要である²⁾とされる。そして、身体や感情にも配慮しつつ、全人的存在として向かい合い、普遍的「問い」について、知的探究を行う哲学的対話は、それ自体、相互理解や、自己知や変容を引き起こ

表 1 専門的緩和ケア看護師教育プログラムの構成

	事前自己学習：該当モジュール	研修会：対話のセッション
1 回目	モジュール 1：専門的緩和ケア モジュール 1-1：緩和ケア病棟 モジュール 1-2：緩和ケアチーム モジュール 1-3：在宅緩和ケア	コミュニティを開く 専門的緩和ケアについて考える
2 回目	モジュール 2：価値観を尊重するケア モジュール 3：症状マネジメント	価値・価値観について考える 症状マネジメントについて考える
3 回目	モジュール 4：スピリチュアルケア	スピリチュアルケアについて考える
4 回目	モジュール 5：家族ケア・遺族ケア	家族ケアについて考える
5 回目	モジュール 6：看護師へのケア モジュール 7：専門的緩和ケアの達成	看護師へのケアについて考える 質の高い専門的緩和ケアの達成について考える

すケア的なコミュニケーションである³⁾とされる。

本プログラムの受講者は、対話形式のセッションを通して、脅かされず、多様な関わり方が認められ、考えたいこと、語りたいことを安心して語ることができるコミュニティを形成し、互いに問答しながら相互理解を深め、探究していくというプロセスを体験する。これは、臨床現場のなかで日々行われている問題解決のためのディスカッションではなく、臨床実践で遭遇する普遍的な問いについて受講者間で問答しながら、苦や死に向き合って生きるがん患者・家族に寄り添い支えていくということについて掘り下げて考えていく。そのプロセスで、受講者は、自己の臨床実践をリフレクションし、自分自身の考えを言語化して他者に伝えようとすると共に、他の受講者の考えを聴き、その人の意見の根本にある価値観や前提を理解しようと試みることで、自己の価値観や前提にも気づくといった経験をしている。また、研修会の1、2回目は2日間連続で開催するが、3～5回目は、1カ月ごとに開催し、研修会での学びを臨床実践と結びつけながら積み重ね深めていくことができるように意図して構成している。本プログラムの事前自己学習のモジュールと対話のセッションの構成内容については、表1に示した。

本プログラムの評価については、修了者に対するプログラム受講前と受講1週間後の評価やプログラムのファシリテーターによる実施可能性が明らかになっている。修了者による評価では、プログラムに対する満足度や有用性の認識は全体的に

高く、プログラム受講前後で、専門的緩和ケアを担う看護師に求められるコアコンピテンシーの認識やS-H式レジリエンス検査によるレジリエンス得点の向上、自己認知の深まり、エンパワメント等を実感していた⁴⁾。

さらに、プログラム修了1～2年後に修了者が認識している臨床実践における変化についてフォーカスグループインタビューにより検討した結果、個々によって認識していた内容や程度に違いはあるが、修了者は受講後の臨床実践において、問題に遭遇した際、まずその問題の本質について掘り下げて考えようとする思考の変化がみられた。そして、対話を通して掘り下げて考えていくなかで、自己と他者の価値観や前提の違いをより認識し、対話の必要性を実感していた。さらに、直面した問題について俯瞰的に捉えようと意識し、問題の本質に早期に気づき、協働するメンバーと共に、苦や死に向き合って生きる患者・家族を支えていくために問題の本質に沿った看護実践に取り組もうとする変化がみられた⁵⁾。また、修了者の上長による他者評価においても、患者・家族や協働するメンバーに対する修了者の変化が認められており、本プログラムにより、継続的に臨床実践における変化をもたらすことが示唆されている。

まとめ

専門的緩和ケアを担う看護師は、苦や死に向き

合って生きるがん患者・家族を支えるために、生や死といった普遍的な問いに直面しスピリチュアルな苦悩を抱える患者に寄り添い支えていくことや患者・家族をありのままに受け入れ尊重することなど、さまざまなコンピテンシーが求められる。本プログラムで体験する対話を通して、普遍的な問いについて探究していくプロセスを多くの方に体験してもらい、専門的緩和ケアの質の向上に向けて意欲的に取り組んでいくコミュニティが広がっていくことを期待する。

文献

- 1) Jackson TE: The art and craft of 'gently socratic' inquiry. In: Costa LA (ed.) Developing minds: A resource book for teaching thinking, 3rd ed. pp.459-465, Assn for Supervision&Curriculum Development, 2001
- 2) 本間直樹：話す，自分を見せる，変わる—対話から場を考える．臨床哲学 15：86-94, 2013
- 3) 高橋 綾：哲学対話とスピリチュアルケア．Co Design 1：25-44, 2017
- 4) 新幡智子：専門的緩和ケアを担う看護師に求められるコアコンピテンシーとその教育プログラム．p.29-49, 筑波大学大学院博士課程人間総合科学研究科 筑波大学博士（看護科学）学位論文, 2015
- 5) 新幡智子, 市原香織, 田村恵子, 他：専門的緩和ケア看護師教育プログラム受講後の臨床実践における変化—自己評価と他者評価．看護研究抄録（木村看護教育振興財団） 25：1-22, 2018